
ライオンの寝つけない夜

さすらい物書き

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ライアンの寝つけない夜

【コード】

N3984A

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

この作品は「ファイアーエムブレム紋章の謎」というシミュレーションRPGの二次創作小説となっております。悩み多き男の子の独白です。原作をご存じない方もよろしければ御一読ください。

(……………ねむれない)

天幕に入る前通りかかったオグマに早めに寝るよと云われたのが逆に気になって、ライアは、まだ寝つけない。

いや、気になることは他にもあった。

「……………」

(でも……………)

(……………どうして彼女はいつも楽しそうなんだろう)

「……………」

ライアは、同じ天幕で寝息を立てる兄たちを起こさぬようそつと毛布から出ると、肌寒い空気の満ちた夜の森へ出た。

この旅は、少年にとって決して楽しめるようなものではなかった。アリティアの王子マルスを将とするグルニア遠征軍。その軍を構成するのは聖騎士アランや傭兵オグマのような歴戦の強者ばかりではない。自分のような初陣を果たしたばかりの若輩者が、かなりの数、いる。

オグマ、そして謎の仮面の騎士シリウスとともに軍に加わったユベロやユミナも自分と変わらぬ年若き少年少女であるし、今あとにした天幕に眠るルークやロデイも、経験が少ないためか同世代のマルスやゴードンに比べると年相応に頼りなく見える。

(でも、それがこの軍の主力だし、ぼくも、その主力の一人なんだ……………)

胸苦しくなる重圧感。森の木々の枝葉が、昼間とは違い不気味に風に揺れている。

「……………あら、ライア。あなたも寝つけないの？」

少女の声が聞こえ、ライアはびくりとして振りかえる。

そこには寝間着の上からケープを纏った、黄金色の髪のユミナがいた。

「あ、う、うん。ちょっとね……。ユベロは一緒じゃないの？」

「ユベロならぐっすり眠ってるわ。案外神経図太いみたいよ、あの子。あたしは見た目どおり繊細なものだから、ちょっとしたことでも気になってね」

ユミナが暗がりの中で肩をすくめる。

「なにが、気になるの？」

「お風呂がないこと」

「え？ あ、そうだね……」

「こんな場所じゃ水も好きには使えないでしょ。全身洗うのは無理でも、せめて髪の毛ぐらいは洗いたいわ。今は手足と顔くらいしか洗ってないんですもの。あたし、自分がこんな匂いだなんて、初めて知ったわ」

そういつてユミナは髪の毛をかき上げる。ライアンは遠慮のないユミナの物云いに、なぜか赤面してしまった。夜だから、相手には気づかれないだろうけど。

「そ、それで、寝れなくて、散歩してるの？」

「そう。あなたも付き合っ？」

「あ、うん。いいけど……」

「うーん、けど、あまり野営から離れないようにしないとダメよねえ。ん？」

ユミナが、何かに気づいたような顔になった。

「どうしたの、ユミナ」

「煙の匂いがする……もしかして……」

「火事!？」

ライアンは辺りを見まわす。火の明かりは見えない。その場からすこし動いて、明かりを捜す。すると。

木々の間から、炎がちらりと見えた。

「ユミナ、あっち!」

ライアンは叫んで、かけだした。ユミナがそれにつづく。炎が燃えている場所はすぐ近くだった。そこには

「え？」

そこには、少女がいた。

炎があたりを琥珀色にゆらめかす中、すみれ色の髪とその衣服は炎に照らされてオレンジ色に映え

ライアンは、目を奪われた。

(……………)

焚き火をしていたらしいその炎にかけられた鍋をのぞき込みながら鼻歌をうたっている少女　マリーシアは、こちらには気づかず鍋の様子を見ている。

「…………… あっきた。こんな夜中に何やってるのマリーシア」

あとから追いついたユミナが、マリーシアに声をかける。マリーシアはやっと二人に気づき、こちらを向いた。

「あっ、ユミナにライアン。どうしたの？」

「どうしたのじゃないわよ！　あなた一人なの？　マリーシア」

「うっん。ドーガさんとカシムさんが今晚の見張りをやってて、そこにおじゃましてたの。ドーガさんなら……………」

マリーシアが首をめぐらす。

「おう、ライアンに、ユミナのお嬢ちゃんじゃないか！　お前達も腹が減ったのか？」

マリーシアが説明するよりはやく、エプロン姿のドーガが布で手をぬぐいながら帰ってきた。

「こんばんはドーガ。見張り番だったの、ご苦労様」

ユミナがドーガに答える。

「今な、夜食にスープを作ってたところなんだ。カシムはほかに放り込む“具”がないか探しに行ってる。ほら、さむいだろ？　こっち来な」

「お邪魔するわ」

ユミナは上品に云って椅子用に組まれた手頃な丸太にちょこんと腰かけた。

「どーしたの、ライアン。あなたもこっち、座れば？」
少女がうながす。

普段来ている白い法着ではなく茶色のやわらかそうなシャツを身につけ、その上に赤、枯れ草色、灰色の三色の糸で編まれたケープを羽織っていて、なんだか見ているこっちもあつたかくなるようなコーディネートだった。

トレードマークの赤い髪どめは今使っておらず、かわりに後ろでその淡紫色の髪をゆるく結んでいた。

(きれいだな……)

自分の心のつぶやきにハツとなって、あわてて視線を焚き火にうつした。

「……このあたりに火をたいてれば、だいたい大きな獣が野営地のほうに現れることはないってわけだ」

「へえ。でも、不思議ね。今はこうして森の動物から身を守ることを考えて、昼間は人間同士で争ってる。……なにか、不毛、というか……動物たちの争いは自然だけど人のやっってるいくさって、やっぱり変よね」

「云いたいことは分かる気がするなあ。……生き物ってのはさ、食うための戦い以外はやつちやいけないんだよ、多分」

「あら、歴戦の鎧騎士さんのお言葉とは思えない殊勝な台詞なこと」

「なんだよちやかすなよ。俺は、守るために戦ってるだけなのさ」

「ちやかしてはいないわ。見直したって云ってるの」

「どこをどう聞けばそー聞こえるんだよ！」

(……)

ドーガとユミナの会話を上の空で聞きながら、ライアンは前から

気になっていたことを聞こうとしていた。
しかし。

「あ、カシム。お帰りなさい」

マリーシアがもどってきた弓使いを出迎えるために立ち上がったので云い出し損ねた。

「ほい。こつちの麻袋にスープに入れるとうまい木の実が入ってる。あと、こんなのがいたんで捕まえてきた」

「えっ、きゃっ!」

カシムが見せたのは三匹の蛇だった。

「おっ、うまがわ蛇じゃないか　カシムでかした！　さすがは狩人だな」

「なに〜　“うまがわ蛇”　つてえ……………」

ユミナが気味が悪いと不平を口にする。

「中身だけじゃなくは剥いだ皮も旨いんだ。だから“うまがわ蛇”」
「このあたりでしか獲れないんでちよつとがんばって捕まえてきたんだけど、なんだ、人数増えてるな」

さっきまでいたのはドーガとユミナとカシム。ライオンとユミナの分の蛇がないと云っているのだ。

「あたし、いらぬわ」ユミナが即答する。

「いや、旨いから食ってみろって！　ホント」ドーガが云う。

「ライオンは食うだろ？」

「え？　あ、うん。でも……………」

「こっしましよ」

マリーシアが、提案した。

「女の子が食べるにはちよつと大きすぎるから、あたしとライオンが半分こするわ。ユミナはカシムと半分こ。で、ドーガは一匹まるまる。これでどう？」

「マリーシア、あなた、食べるの？　蛇を!？」

「え？　おいしいんでしょ？　食べてみたい。お腹すいてきたし」

「……………あきれた」

結局提案どおりの配分で焼き蛇を食すこととなった。

スープにカシムがとってきた木の実を入れると、えもいわれぬいい匂いが鍋からこぼれだした。そのすこし癖のあるスープと、美しい少女と分けて食べる焼き蛇の味は、この奇妙な夜の夜食会の雰囲気そのもののような気がした。

「ね、マリーシアはどうしてこの旅に出たの？」

ライアは、なかなか聞けなかった質問をあっさり口にした。

……どうして今まで聞けなかったんだろう。

「あたしが旅に出たわけ？ うん。理由はふたつ、あるかな」

夜食を食べ終えたマリーシアが、その質問に答える。

「二つ？」

「ひとつはマルス様 あんなにお若いのに誰よりも落ちついていて、やさしくて、強い人だから、もう一目惚れしちゃったの。古い伝承にある、“世界の中心にいる者”ってきつとマルス様のことなんだなって思った。あ、その伝承っていうのはうる覚えなんだけどね」

楽しそうに自分の軍の将のことを話すマリーシアを見ても、不思議と嫉妬は覚えなかった。むしろその姿がほほえましくて、応援しなくなるような、どこか矛盾した気持ちをライアは抱く。

「そう。“少女はその人に会う”だね」

どこかの国の作家が創ったお芝居のタイトルを引き合いに出すと彼女は「そう！」と力強く肯定して、わざと遠い目をしてみせる。

そんな様子がおかしくて、ライアは面白いのになぜかすこし、泣き出す前の感情に似たような気持ちになって、よく判らなくなってしまう。

「でね、ふたつ目の理由」

（あ、そうか。ふたつ目もあるんだ）

「旅に出たかったから旅に出た、なんか変な云い回しね。うう

んと、なんて云うんだろう。あたしね、こう思うの」

マリーシアは語りはじめた。

「道とか、家とか、街とかって、人と同じでココロがあると思うの。で、その場所に住む人たちにいるんなことを求めちゃうの。このひとはこんな人であって欲しいとか。だからその場所に合った性格になって、影響を受けて、すこしずつ馴染んでいっっちゃう感じがするの」

「うん」ライアンはまだ理解していなかったが、止めずに先をうながす。

「人と場所がなじんちゃうと、あとはお互い楽だから、あんまり『自分』という存在を考えなくても日々過ごしちゃうわけ。旅に出るからあたし、ずっと自分のことを考えてるもの。旅をするとき、場所の影響を受ける前、その場所に馴染む前に次のところに移っちゃうから場所は場所、人は人のままでいられるって、そう思うんだけど……こんな考え方って、変？」

マリーシアがライアンをのぞき込む。

「いや、マリーシアってすごく難しいこと考えてるんだなあって、……感心した」

ライアンがそう答えると少女はにこつと笑い、

「これでも司祭を目指す勉強家なんですからねっ。見直しなさい」と怒ったふりをして云った。まんざらでもなさそうだ。

「なんだか、彼女がこの旅を楽しんでいるわけがわかったような気がした。」

「ライアンは、どうして旅に出たの？」

「え、ぼく？　ぼくは」

「ほれ。お前らも口直しにこれ飲んで見る　後味すっきりだぜ」
ドーガが急にそう云って銀色の盃を手渡してきた。

「え？　あ、うん」

「あ、おいしそう！　あとであたしもね」

口当たりのよいその飲み物はお酒だった。そうとは知らずこぶ飲んでしまった三人の少年少女たちは数分後、すっかりふらふらになってしまった

「そろそろいい頃合いだ。この夜会はお開きにしようや。ライアン、お嬢さん達をそれぞれの天幕まで送ってやんな」

「うん」「はあい」「がんばってね、ドーガ、カシム」

三人は見張りの二人にお休みを云い、焚き火の炎をあとにした。

「じゃ、おやすみ」

ユミナをユベロとオグマが眠る天幕に送り届ける。そして次に残りの女性陣が休むいちばん大きな天幕へとマリーシアを送り届けた。

「お休み、マリーシア」

ライアンがそう云った。

「うん。もうねむれる？　ライアン。あなたねむれなかったから散歩してたんでしょ？」

「えっ？　どうしてわかったの？」

「ふふっ」

マリーシアは答えず、とびきりの笑顔を見せた。

「お疲れさま、ちいさな弓使いさん」

マリーシアはそう云って、ライアンの頭を撫でた。

「それじゃあねっ」

少女はそうして、するりと天幕の中へと消えた。

「……………」

(ライアンはどうして旅に出たの、か……………)

その問いに答えられるようになれば、彼女のように楽しく笑えるのだろうか。

「……………」

ライアンの寝つけない夜

子どもあつかいされたのが、ちょっと悔しかった。

(後書き)

5年も前に書いたので、今とは少し文体も違いますが、愛着のある作品です。よろしければご感想をいただけると嬉しいです。よろしくお願いいたします。

ライアンの寝つけない夜

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3984a/>

ライオンの寝つけない夜

2008年11月7日07時58分発行